

Fate/second order ~
二人目のマスター~

むこうぶち

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

崩壊した人理を救済する

そんな難事オーダーに立ち向かう二人のマスター

英霊に愛された少女、藤丸立香

少女と共に世界を奔走した魔術師、獅堂天理

これは二人の紡ぐ物語

目次

第一話『事の始まり』

1

第一話 『事の始まり』

拝啓、天国の父さん、母さん、そしてご先祖様。俺、獅堂天理は……

「さて、言い訳があるなら聞くわよ天理」

歳下の女の子の目の前で土下座中です。

獅堂家は魔術師の家系である。他者へと秘匿し、過去へと向かい根源へと至る、と言うのがまあ殆どの魔術師たちの在り方だろう。だがウチ、獅堂家はそもそも成り立ちからしてかなり特殊である。十三代も続いた、となれば名家として数えられてもおかしくないが、言ってしまうえば獅堂家は『変わり者』扱いなのだ。

記録によれば、初代はロシア人だったようだ。家系図も文字が掠れ、しかも公文書ではなく自筆なので判読は不可能だが辛うじてロシア語だと言う事は分かる。そこから代々、ありとあらゆる国の、ありとあらゆる魔術体型を結婚と言う形で片っ端から組み込み続けた結果として獅堂家の魔術とは『実戦派ハイブリット魔術』とでも言うべき限りなく異端な存在となっているのだ。

でだ、実戦派、なんて付けるだけあってウチは魔術師の世界の中でも『武闘派』として名が通ってるんだ。まあ俺は両親から魔術刻印こそ受け継いだが本当の基礎しか

習ってなくて、獅堂の魔術に関しては書物で学んだ程度。あとは『師匠』から学んだ魔術がメインだから正統な獅堂の後継者、とは言い難い。

でだ、それでも戦うと言う事に関しては『時計塔』、『アトラス院』、『彷徨海』の魔術協会三大部門からも一定以上の評価を保っていた俺を彼女、オルガマリー・アニムスファイアが訪ねてきたのは半年前の事だった。人理継続保障機関『カルデア』の成り立ち、近未来観測レンズ『シバ』が観測した『断絶された未来』、その未来を取り戻すための『時間航行』、そしてその航行者たちをありとあらゆる手管を使って集めていると言う事。俄かには信じがたい話ではあった、だがその眼に嘘を感じられなかった、だから俺は『カルデア』に身を置く事にした。

のだが、まあ半年と言う期間で露呈していく俺の日常生活でのだらし無さ。それに對してマリーの対応が徐々に塩対応になるのも当たり前と言えど当たり前だったか。最初なんか「獅堂さん」とかだったのに最近じゃ「天理」とかルビに「ロクデナシ」ってふられてる時があるんだぜ？まあ重要な会議をすっぱかして職員と徹マンしてたり、今日も某医療セクションの職員と二人でアイドル談義してて時間航行、名称『レイシフト』前のミーティングに遅刻しただけだぜ？

「本来、貴方は戦力として最高峰。ですがこうも毎度毎度規則違反を犯されては罰を与えなければ示しが付きません」

やっぱり？

「獅堂天理をBチームリーダーの任から解任、また特異点Fの探索終了までの間自室謹慎を命じます」

「H A H A H A H A H A H A」

「ダメだこの大人たち、何とかしないと・・・」

そしてあれから三十分後、ミーティング中に立ったまま寝ると言うウルトラをやらかし同じく自室謹慎を言い渡された少女、藤丸立香の自室で俺が最も親しい医療セクシヨンのリーダーであるロマニ・アーキマンと二人で「ニート理論」を展開してたら白い眼で見られたでゴザル（笑）。

「つて言うか何で女子の部屋で勝手にくつろいでるんですか!？」

「人聞きの悪い事を言うなよ藤丸、元々は俺たちがサボりに使ってた部屋にキミが入室したんだ」

「そもそもサボりに部屋一つを丸々使うってどうなんですか!?!主に社会人として!!」

社会人つて言われてもなあ・・・俺は大卒浪人中のフリーター、ロマニだつてこのちよつとブラック企業に片足突っ込んでる組織の中間管理職。まっとうな社会人とは言い難いが・・・

『ロマン!! 貴方どこで油を売っているの!!』

突如、ロマンの付けるリストコムから聞こえる聴き慣れた怒声。

「あれ? もしかしてもう時間かい?」

『とつくによ!!』

「すぐ行くよ!!」

ロマンが慌ただしく部屋を出て行くと、藤丸の視線がこちらに向けられる。

「まあ座れよ、ミーティング寝てて話とか全然聞いてねーだろ? 同じ日本人のよしみだ、一通りの事は講義してやる」

「.....うん」

「うーんと、つまりは『未来を取り戻せ!』とか『世界の破壊者』とか『通りすがりのマスターだ』みたいな感じ?」

「そこはかとなく頭の悪さと厨二病の素質を感じるがまあ、概ねその通りだ」

まるで九つの世界を破壊したった一つの世界を救おうとしたライダーみたいな事を書いて出した立香。

「そう言えばシドさんって魔術師、なんだよね?」

シド、つてのは俺のカルデアに来てからついたあだ名だ。最初は名前で読んでもらお

うと思ったんだがカルデアの職員の大半は西洋系、「天理」を「テリー」とか「テンリー」とか発音が怪しかった。で、仕方ないから苗字で呼ばせようと思ったら今度は「シド」になった。んで、どっかのゲームの万能な機械整備士みたいでカッコいいなーと思ったからそのまま「シド」を定着させたワケだ。

「まあな、本来ならお前も所属するBチームのリーダーを務める予定だった」

「だった？」

コテン、と首を傾げる立香。

「遅刻し過ぎて解任された」

「えー」

白い目再び、そんな目をすんなよ。俺だってその気持ちに分からんでも無いけどさ、俺は他の魔術師より魔力の回復効率が悪いから睡眠時間とかも必然長くなるんだよ。

「まあそれはそれとして、どんな魔術使うの？」

めつちや眼を輝かせて聞いてきた、うん。コイツやつぱり厨二病そっちの素質が強いのかも知れない。

「俺のはちよつと・・・いや、かなり特殊なんだよ」

元々獅堂の魔術も特殊だが、俺の師匠もかなり特殊でその術も更に特殊と来たもんだ。特に師匠から教わった方は下手すりゃ封印指定も見えてくる骨董品魔術なわけだ。

が。

「へえ？それって……!!？」

突如響く爆発音。そして続けざまに警報。

「何が起きたってんだよ!？」

「あつ！待ってよシドさん!!」

俺と、後を追うように藤丸も部屋を飛び出していた。向かうべき場所は一箇所しか無い。

「ロマニ!!」

「シドー!」

管制室前へと来れば、ロマニがいつになく慌てた様子で職員たちに指示を出している。しかも怪我人も数人いる状態で、だ。

「レイシフトルームが爆破された、所長以下46名のマスターたちの状況は未だ確認出来ていない」

「なら俺が行く、多少壊すが文句は言うなよ?」

「人命優先だ、いざという時は所長に二人で怒られよう」

互いに頷きあつた頃に、息を切らした藤丸が到着する。

「着いてこい藤丸！」

「ええ!？」

緊急事態と言う事もあり、レイシフトルームのドアセキュリティは正常可動していない。開けるには力技、この場合は……

『ストレンジャス
力』

これが俺の魔術の一部、まあルーン魔術の亜種だと思つて貰えれば良い。これの効果は単純な身体能力の増強、つまり。

「オラアっ!!！」

ストレートの一撃でひしゃげて吹き飛ぶ扉、後ろで「うわあ……ゴリラ」とか言つてる藤丸は後でシメる。

「っ!？」

熱と煙、そしてむせ返る程の血の匂い、何より……

「何だ……こりゃあ」

真つ赤に染まったカルデアス、半年いたがこんな状態は見た事無い。

「マシユっ!!マシユ!!」

「う……あ」

藤丸が職員の一人、マシユを見つけたようだ。だが瓦礫に半身を潰され、長くは無い

だろう。

『シド!!立香君!!直ぐにそこから出——』

『システム、レイシフト最終段階に移行します。座標、西暦2004年1月30日、日本、冬木』

突如響いたロマニの声、それを遮断するようにアナウンス音声が始める。

「遅えよ、バカ野郎」

今のアナウンスと同時に中央隔壁、ここと通路を繋ぐ隔壁が降りちまつてる。何より……多分、藤丸はマシユを置いていく事をよしとしなかっただろう。

『適応番号13、獅堂天理、適応番号48、藤丸立香をマスターとして再設定します』

コフィンにはほぼ全滅、残ってる無事なものも瓦礫が邪魔で無理。

「コフィン無し、サポート無しでのレイシフトか……死んだな、こりゃ」

諸々細かい理由はあるのだが、通常はレイシフトはマスターの体調、飛ぶ時代の状況など各種事項を精査し、成功率が一定以上でないと行われない。その成功率を上げるための器具がコフィンなのだが、俺と藤丸はどうやらそれ無しで強制レイシフトをする事になりそうだ。

『アンサモンプログラムスタート、霊子変換を開始します』

『レイシフト開始まで3』

『2』

『1』

『全工程、完了。^{クリア} ファーストオーダー、実証を開始します』

そして俺たちは、光に包まれた・・・